夢脆剤 巻之四

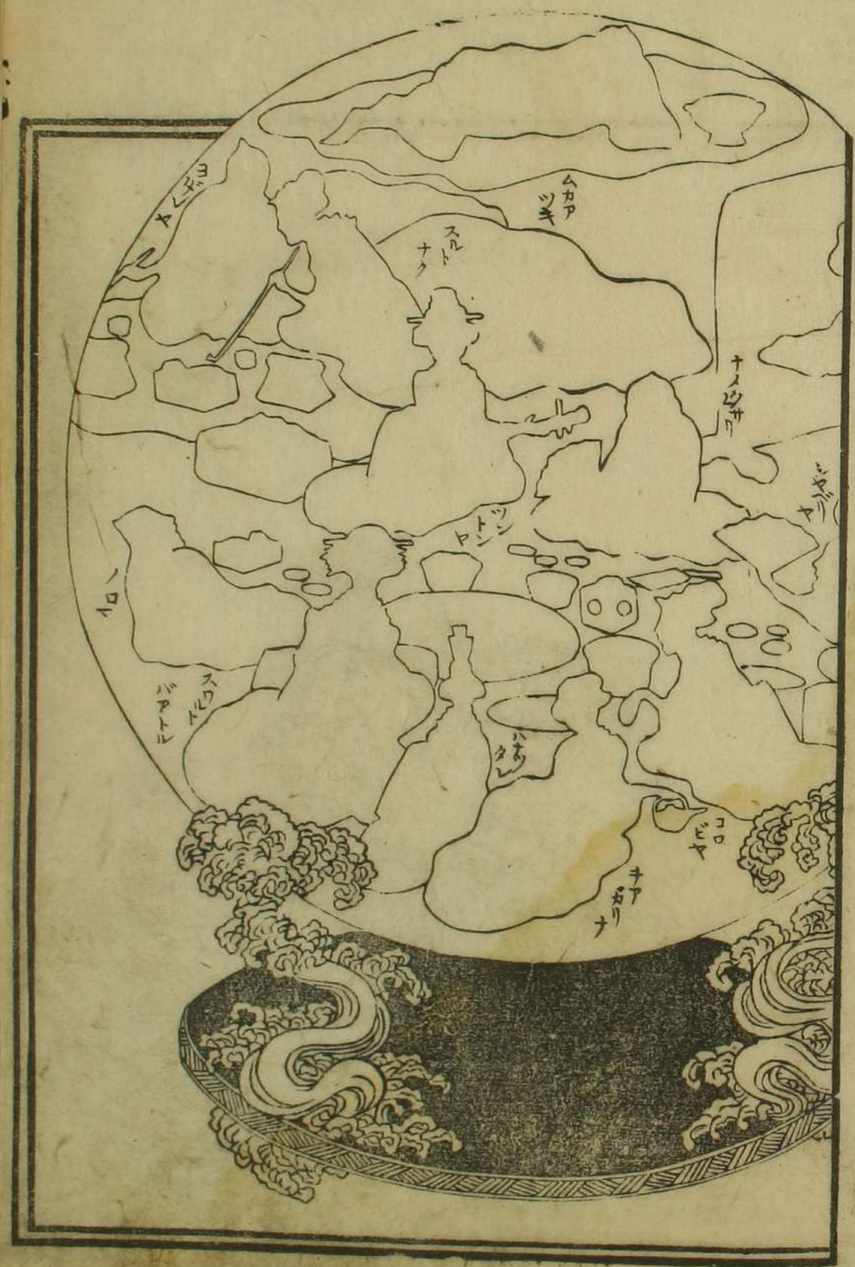
13
1317
4

ヘ 13
1317
4

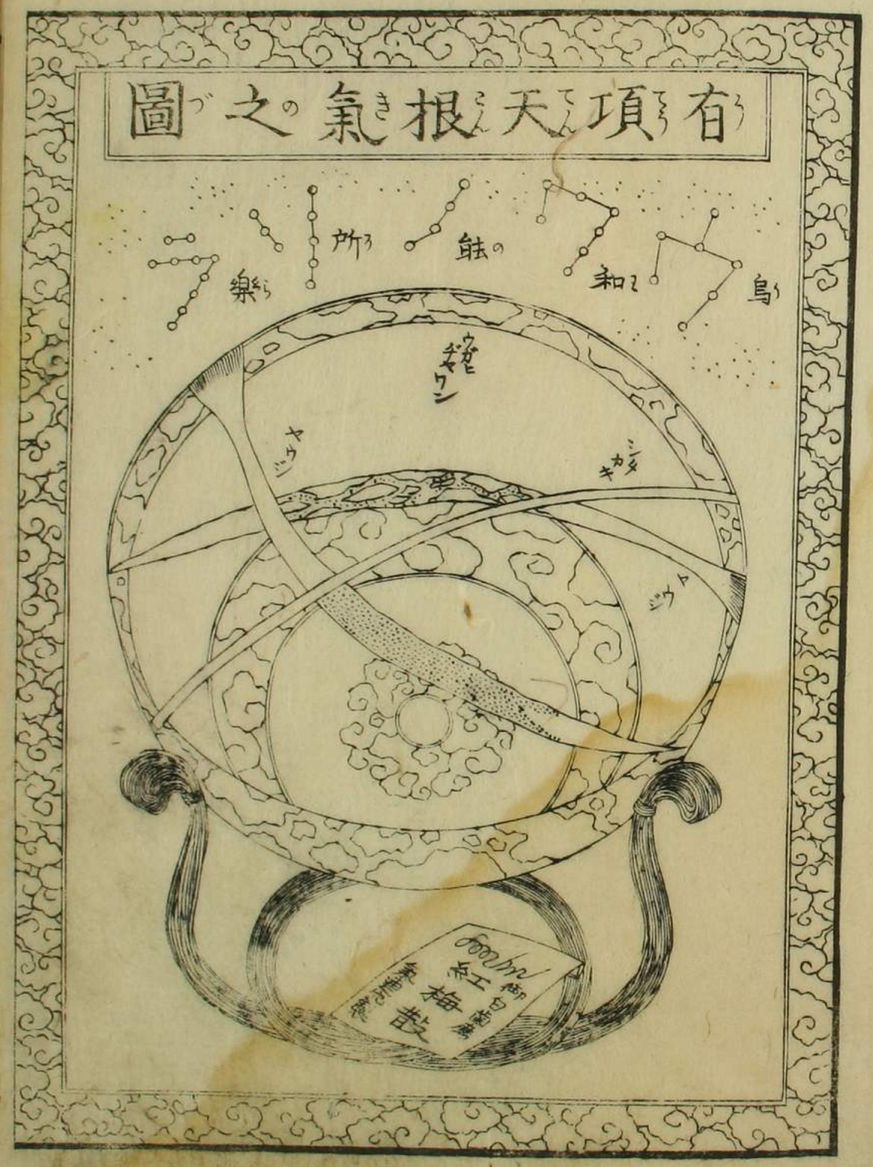
無飽三戈圖會巻第一目録

天文之部

花柳別世界畧圖
忉利天の中二階夜盈ちの圖
日蝕　日のやまひ
意知夜月　孫月
太白
總天之說
有項天根氣之圖　天說
仝　十二支繰揉の支
月蝕　月の障
北極
二十八宿


ムカツキ
ナノヒサヤ
ツンドヤ
ヒロ
スワバトル
コロビヤ
キアガリナ

ユメイロ



附言

一 曩ニ曉氏の著せる刷の三賊圖會。既ニ穴を極め腹を忍ぐ。敎〳〵文句よおのづから。勸善醒愚のこゝろを含ム。此世界の日月草木。鳥獸龍虎をひつさゝく。滑稽の眼を引ぬれ。ゐとゝ殘るハ可憐盲同おの新作者撲宗〳〵のこゝ附業法師ゞ娼を買ごとく。聲女ゞ敵を搜ニ似ゝり。滑稽のよいのゞ足元ニ落てゐゝ〳〵道理もなく。撲りゐくるハ費束なゝ。たゞ前篇の大當の尻うゝ附く行つゝり。曉氏の虎手びき宜〳〵ほ引廻〳〵と爾云

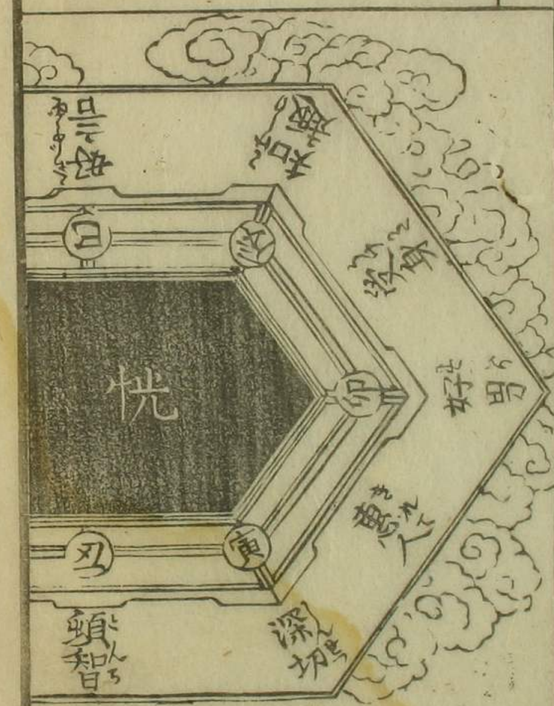
幻花情史識

夫天ハ六の數を以て成す。六〳〵三百六十度即ち西洋周
天の數なり。故ゆ六〳〵ゆ商賣ゆ身を入れば常ゆ六でも無
さとて悅び或ハ藝子六服の憂ゆ泣ひて嘆六〳〵六言
を忘れるゆて六ぢゆ尾ハ宿ゆもらふべ必ずべ六な朋友なし。
きのこ風の友ぐち日ゆ〳〵おめ〳〵も女郎買ゆやア天と根氣ゆ〳〵ぜヤ今お目
ざめゆ馬鹿ら〳〵の根引ぐ則是嗽口茶椀を以て天躰ぎ
と渾天儀とごちゃも附ぶの故吏附なもの本なり。嗚呼
亦幽な附會なふぶやや蒼天冥〳〵たるべうふぶとハ分らぬ
滑稽をいふ成べ〳〵却て又六づく〳〵の說をなも夫一年六度

是を節季と云ふ。客道廻りの〳〵き時ハ節季ゆおくるゆ支
或ハ五日十日十五日といひ延れば晦日又節季となる後ゆ〳〵こと
一度又ハ二度三度ゆ五度ゆ客横道を廻つ〳〵孫月
横ゆ出るを俗これを踏と云却つ〳〵又茶屋の孫月い〳〵
畢天ゆ見ゆる支ゆり或ハ六〳〵首を待夜の深更ゆ見せ得く
ハけちな天文を見る人一六短氣ゆ損氣の立支ゆり此氣ゆ
時ハ則ち武士ハ六ゆ離れ商工ハ終ゆ六ぢ行ぶ百の口六文
拔〳〵ハ又六な考ハ出ぶ唯一年三百六十度通ひつめてハ周
天の度數則是六〳〵三百六十度ハ近來阿蘭陀の說なり古

来周天三百八十一度となるものハ。毎年を通ひつめ
算用なり。此を以るの故ま極道も亦根氣がなりれ
行ひ。回る天根氣の牽強亦御尤千万ならば耶

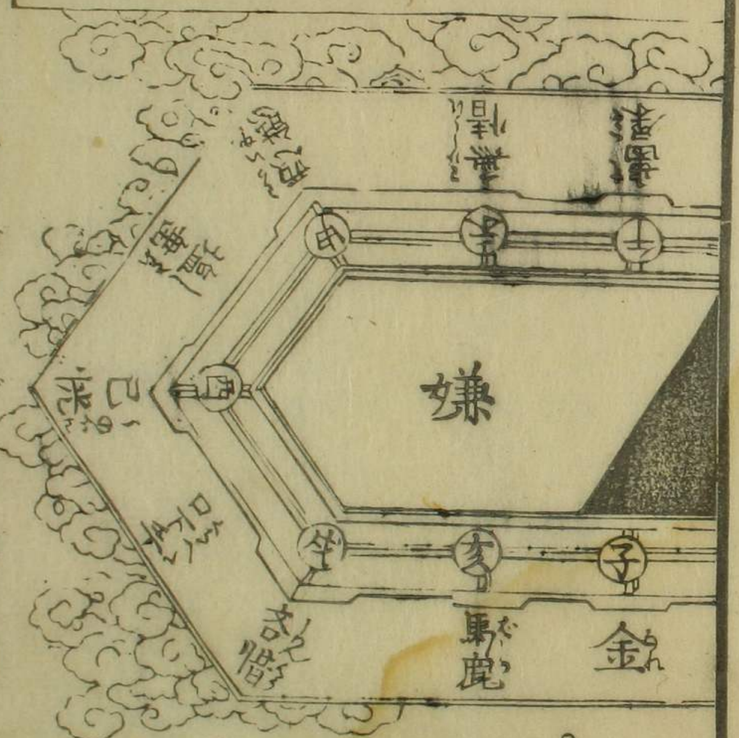
加州利天の中



出とりやうハ悅ろん
方ハまづ金ゝ
じまる次ま頓智
ときて深切ゝ
始終ゝ
ま終る深切ゝ
りハ何ゝ
とも金二両ゝ

三一ノ六

二階夜畫なしの之圖



此圖ハ夜畫の圖より出る牽強也。黒ひハ何ゝ悅られ
わるゝハ悅ゝ
。嫌られる方ハまづ
一番ま歯厚ゝ
月まつき夫より
無惜と来て吝
馬鹿まさんて
終る。
十二支の徳ゝ
次ま記れ

立。白ハ死ぞ嫌れ立なり。恍られうと来てハ向ふ見へぐ真黒門。親ハ苦労をさせ。己も苦労絶ぐ。居續ハ夜晝の差別なく五行ハ有くハ則ち金也。又水也。金ハ色黄なりよつく黄の祢を志なぐ。金を水のやうハ遺ふ。水ハとと其色黒し音ハそいなり。己ぐり粹ぐつく黒ぐる的也易ハ行くつくハ損の象と用也。數ハ行つくくハ常ハ九ハ成四九又ハ八九とに四九八九七くく九面ぞれぐ也。嫌れると来てハ鮭白とおけハ逢白歯を見ぞれぐ。直ハ代物ハきれる。振れと夜さハ東白ハ夜具の虱を見付さぐうぐ仕支ハ又ハ又ハ白〳〵とく〳〵嘘をきく。

五行ハ有くハ木まぐめ。又火のやうハ怒る易ハ行つくハ離の卦ハ。中絶るぐ一番の得なり。數ハ有くハ四五なり死金をつくひ。四の五のと云る〳〵故ハ。恍られうと嫌れさのハ黒白の遠ひとハ是〳〵云ふ也

○十二支の緑ぬ〳〵ハ子を始めとも。則ち恍られる方ハ属に。子ハ。子ぐ浮氣也。丑ハ丑ろく廻也考へなく。寅ハ千里を遠〳〵とせぐ通ひ。又寅詰合〳〵金を起也とふ支行り。卯ハ卯の如く。又〳〵ても酔の川へ沉む。辰ハ辰なり知人ぞ知べ〳〵又腹ぐ立なり。口舌の絶めも此なくひ。辰でも亥ても

こゝに南京ゝさとの曼ゆ思ひ出ゝ難く〳〵故ゝ
へ〳〵と故ゝ人ゝ人ゝ其ゝ人ゝ
を〳〵ゝ入ゝ鶴ゝ（鶴ゝ）の社ゝ
ゝ西ゝ鶴ゝ西ゝ
ゝ申ゝ申ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

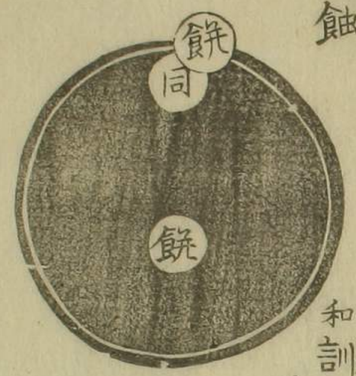
いつまとんとハ辰ても西ひ羣強なり。巳ハ身の上なり故ゑ恍
られる者ハ子ゞ浮氣より始り。身の上ゑ終る
午ハ嫌まゝ方なり。午ハ馬也是ハ受られぞ。相手ゞ城の
馬場でなれば治まゝ。未ハ未のどく。髪を切てゆとゞ
嬉しゝ。延たゝ〳〵て一盞くふ實ハ五十の副髪なるを
ちゝ申ハ申とハ爪長く。人の物を抓取さゞる又〳〵も
牙をむく也酉ハ鷄さばるの〳〵ゑ非ゞ。酉ゑのあい飛
上り。其人を躾蹴つゝ毛ぎゝひ仕也。綾鷄な人ゞゃゑ
らひ南京ゞやと去る也。是ホハ思ひ鶏べ〳〵戌ハ戌〳〵とりひ

ても。女ゞ一すゝ〳〵おべつゝゑ尾を揮ゝ悦ぶ的なり。食つくと
深ゝひつこ〳〵。夾ハ猪向ふゝびゑ遺ゝける。相てゞ堪ふゝ却て
さしての人猪豆〳〵ゝほをゝ〳〵位のばゝあり。故ゑ嫌ゝれ
立ハ午ゝをかゝ。午〳〵とゝてゆゝれ。根ハ猪の向ふゝび人の
情の分らぬゑ終る

○日蝕ハ陰陽を掩ふ。陰陽ゑ蠃の象とて。故ゑ日影
ゞ黄色まゝゝくて。頤ゞ蠅を逐也ゞづれ去ふゝび。日ハひね
なり。食食也無茶食也。漢の唐人いゝる支なり。酒なり緒
の如く。酌ゑあゝ〳〵則ち酒ふゝれ。餅なり月の如く。食ゑ遇さく

即飲ぞれ毛唐人の洒落なり。是ハこれ月蝕の聯句作者日月ぐゝいハ頓著なし。以ゝ日蝕の牽強となに食自満の客切なき思ひを忍ゝ曰最前ゝ酒をたゝ飲く呑ゞ大の鰻五鉢飯を八たい二朱の丸を独ゞ片付て跡ゞ五文の餅を四十七食て。跡ゝ三ツ残つゝく（と伸をバ〳〵ち月ようゞ先一ぷく。どゞゞまちうゝゝ苦をゝゝ。そうとたゝを押てゝゝ。咒八九の此盆ゑ山盛ゆつゝのゞなつゝ三ツ残つゝ。もし〜狐つゝひゝさるのゞやちゝせんうげれ子ハ誉ゆゝゞちゆの也ゝ是ゝ。是を以てづゝゝれ丸盆ゑ餅の三ツ残りゝゝを牽強〜と知べし。故ゑ這ての

日蝕



和訓
ヒノヤミヒ

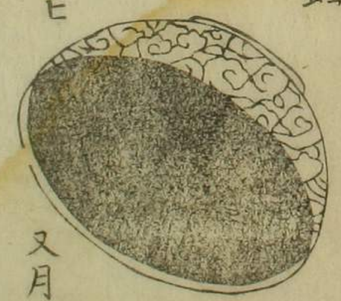
意知夜月

一名
孫月

和訓
ヒノヤミヒ

上月
下月

月蝕



和訓
月ノヤミヒ

又月ノサワリ

太白

比極

馬鹿。いづれ脾胃の病を煩ひ。黄疸となる。回〻日の病ハ其色黄なる見也。三アリ〻つゝの二アリ〻つゝのとき食損を仕らるなり

○月蝕ハ。月坤輿の影ゑ障ゑれて。大陽の輝を受ぢ故ゑ。其色黒く見〻〻先りるゝ。和訓月の障又月の病とふ。月ハ陰なり。陰ハ女也。媚婦の陽物を受ざるハ月の障の甚しゝれば也。此病ある者或ハ三日長さハ四日痛〻つゞけと来ハ引〻居なり。日一歩儲そのふでも。月ゑ四アリ〻也。四アこれを一両とふ。即是血道のめぐり回〻媚婦腹を押ていく

痛〻〻。私のやうゑ不淨腹ぢ難儀するの。誠ゑいんぐいじゃ。いや今度ハ紅猪口の。紅ゑぐ此容ゑ類つく。真黒ゑ焼さ是を以〻圖いこれ。紅猪口の紅の。類りる牽強なるを知べ〻。月の障ゐれば口紅の色黒くして光なゝ。仙人是を主〻利風を吐いぢ吏ゐり。其光りを矢ふを以〻なり。便月蝕ハ陰陽を受ぢ女男ゑ所をざる理屈となゞ。節用集を見る者ハ此説のあたるを知ん

○意知夜月此月陽氣ゑ屬する時ハ空ゑ孛名の立夏ゐり中戸格子前柳下盆屋此世界の一夜月是を孫月とふ

俗ハ四月朔日を一夜月とらふハ誤也。五月の節句。粽の紋日。
いちや月ハ訓ひへども。若此月出る時ハ。娼婦の孫月となる。
此月客道を廻る時ハ。部屋住畢天の間ハ出ると一年六
回前篇ハいふ前の月の欝ハ〳〵て客の孫月也。三月二日。五月
四日。七月十四日。九月八日。十月晦日。此月若出ざる時ハ是を中
戸なしとふ然る時ハ十二月晦日孫月重なる。上月下月ハ世
俗の志る前なり。回〳〵ハ洩也。又此作を一夜附とらふ也
。北極。日本の地北極地を出ること三十六度此北極ハ志〳〵ぶ。
北ハ北也極ハ極道の極の字なり。得ハ茶屋つゝひの尻を塡んと

変な天文を見る人。平一度より二度ハ至り。三度ゞ五度ハ成
異見の爲人ゞなハと。終ハ三十六度ハ及び夫より度數の
志れぬ人間界外ハ吟行。故ハ捨而措者必三十六度とらふ。
嗚呼亦ゝ志ゝ志けなり
。太白星ハ五行ハ有〳〵ハ金星也。日輪を志んハ〳〵て。後ハ
なり前ハなり〳〵廻る星なり。日ハ先ゞうを曉の明星と
いひ。日ハ後れ〳〵入を宵の明星とらふ客道ハ行つ〳〵ハ毎
親の象となを息子を真ハ〳〵〳〵後ハなり二前ハなり。
影ハなり日向ハなり〳〵朝ハ明星と共ハ起〳〵朝戻の

首尾をつくろひ。暮ハ夜歩行を苦よして。人ニ後るゝ
窮る。脇くり金をこのゝへ又息子のためよ金をかしごゝる
是金よ属する星即ち金星なり其ゆゑ太たくの
ごし。故よ太白星とふ息子の為よ資身のそぼる時ゝ
太白星光りを失ふ子よ四討のゆゝる天変とゝ
○二十八宿。一宿ハ儘の川二宿ハやけと成。終よ居續二十八夜と成
是を二十八宿とふ咸く説ゆゝ。こゝよ洩さ丁数の限りゆゝれバ
○角宿和訓さだし「そめき」又「地廻」格子前よ一夜を明し
客の帰るを待ゝ逢ふ是をさぼゝとふ。又女のさぼゝハ

ハ室宿の生ゝハ室を同ゝし。死ゝ花見ゝ咲ものゝおゝくハ夫よ
勝手よ畑宿。参宿の深切稀よ便なき身も箕宿とおゝ。
風の柳の抑宿よ人情日ゝよ薄くなる客も娼も星宿の誓
文起請の流行ぬ時節。尾ゝれ星のゆゝれと思ふ人のゝゝ
ゝ。實よ斗宿のゝゝ
作者稟ハ。二十八宿咸説をなぞき耶紙數限りゆゝるを以ゝ
つゝゝよふと駄ゝ擦なゝ此ゝゝつけ。花子の皷舌文句ゝ似
たり。何のゝゝ分ゝ儒者と作者ハ花子高賣曰ゝ
這般の文句も出る也扨指を折ゝ數ゝれば昴宿を落し

たり。昴宿和訓まるぼし星。是より又三才圖會の文体に倣ふ。
昔仲居氏畳をたゝいて曰く〳〵お坐り。曰く客よ出るを
昴とゝふ昴ハ坐なり。此星南へめぐつて。中天よりいづる頃をも
つて。俗寐むゝの時候の印とす。星ハ即ち和訓欲と同じ。
故ゑ客の心竊ゑ早く坐つて〳〵と思ひ。又早く寐ん
ぐる曰く〳〵昴星とゝひて早く休ゝき時候とする也

。總天之說

夫天ハをと雲つゝむが如し。聖人醉を通して能加減なことを
。西洋聖夫をゝつゝ理屈ぐゝ休ゝ。横町の喧嘩既

二十八宿之圖

金星ゑ比べれば青銅星至つて
大造なり是金星ハ青銅のゆ
えゝよ高き故ちいさく見る
なり重工の非なるハ閲客
くゝびゝふ
とゝなれ

角宿耶を出して寂る也。亢宿和名「あみぐし」二布を
干けを干けとふ五條橋下の方言也。氐宿ハ飯
代の仮店なり。翼宿和訓ハ「たまき星」思ひの傳をたま
きはかみお客を縛るも本翼宿。そのゝ猶も奎宿。女宿
ハ女身を「うるき星」未ハ夫婦ゝ張宿鬼宿ハ則ち内心如
夜叉。軫宿ゝつゝもる風の前なる井宿ハ壁宿の艶く姿ゝ
心ハ錬の妻宿。陽ゝ湯となる如くなるべし。添臥の身宿
獨寐の氐宿。露妓の真夫の牛宿まて。二人が中の心おし
恋ハ畢嘴の際なるも。悟るきゝハ虚宿の嘘ゝ誠なる身

不管。音信不通の天の夏高賣人なゝびバ彗星が出さと
ゝ頭着なし。挿花挿世界の天文天象花合せ月待
日待ゝ代待や。北辰妙見大菩薩ゝゝ夜さハ破軍の
剣先七夕節のお客ゝ今日ゝ居續二十八宿大白星の
うゝき首尾日の鳥の日ゝ紋日。戈鳥と世間ゝ全蚩の氣ハ
弓張の月なゝで月ゝ出朋しの借錢ゝ。漸を以ゝ減るハ猶
是ゝ下強の月のごく。質屋の捨利店の敷夜ゝゝ滿るハ
是上絃。上絃中亢八朔下絃一現二會のゝのしらのハ都ゝ加
減の前ゝりゝ。心をゝる渾天儀泣ゝゝゝるも嘘宿の分

陛おりふよ添ぶ思まめよ。總じて此天浮の空。烟花國ハ故み
浮世の人の浮氣の立のぼり此天をとつ成べ〜。野夫塵芥の
芥ひとつ。出ては嫌ひの〜まん坊人間天上の楽をまつぶ。音も
天上。仙人も白日昇天と洒落うける。天堂も天よりの。ぢと餅か
棚よりの。きちな老人と金持の一文を〜この百まつぶ無牛よ
きぶい夏をいひ。千代よ楽〜まつ〜夏をまつぶ。これ〜の馬
庶ハ却つ〜是池の鼈生れつき土を離れぬせ〜こまく。迚も
天上の楽〜らぶ。皆是仙果い有ぢぶ仙骨のなき大凡夫
此世のぶなる塩魚の地獄（落こる人多〜。されぶと〜智

恵もなく。おだての風よ吹上ぶれ。登りつめさる浮空。這的も天
上をぼつろな〜。粗かぶげる〜手を放ぶ口開く天のふをちる。
石亀のぢぶんぶも後悔さぶよ立ざるぶ〜。夫乾を天と乾
ハ是其卦をぶ〜陽をかされ日を重ねぶい去〜はあぶ。又七
夕のぶまさるよ逢ハ嬉〜〜別ぶつ〜〜思ぶ中の天の川おりひ
めりなき梵天帝釈ひとつる扨入鵲のたぢも人目もつむ
よハ心よ遑のなきも亦此天上の楽あるべ〜。情をまつぶまハ
何をぶ説ん夫地ハ右旋〜天ハ左旋ぶ左の旋よ順〜
つの誘る〜浮の空。ふぶづ〜てハ雷の宿ぶよ落ると多し。

詩ニ曰天行嶮くつゝよ艱難さ出くいる者も此のごし。
餘所目ニ志ふぬ艱難辛苦節季といふ苦ゞなくバ惜志
らぞの客道ハ必綺羅めく綺羅星の分野ハ変して犯ス
とのくさゞ

無飽三賊圖會一之巻終